ライフ・ジェネレータ

壇 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ライフ・ジェネレータ

【Ｎコード】
Ｎ２４９７Ｄ

【作者名】
壇　敬

【あらすじ】
宇宙局の新井は、ギャラクシー社の星野から宇宙船設計のために、ある装置を借り受ける。実に不思議なその装置に新井は異常な興味を見せる。その装置を巡って新井と星野の攻防が始まる。

装置との出会い

その男は、大きなカバンを抱えて現れた。

「宇宙局の新井さん、ですか？」

男は僕にそう尋ねた。

「はい、そうですが。ギャラクシー社・日本支部の星野さんですか？」

僕は問い返した。

「ええ、今はそう呼ばれています」

僕は不思議な言い回しに疑問を持った。

「え？『今は』って？」

星野と名乗る男はニヤリとして言い返した。

「まぁ、堅苦しいことは仰らずに」

そう言い終わると、大きなカバンを机の上に置いた。

「早速、本題に入りましょう」

星野は言い終わると、カバンを開けた。

カバンから密閉容器が出てきたが、それをもどかしく施錠を外して

蓋を開けた。
そして中から銀色の物体を取り出し、机の上に静かに置いた。
大きさは一辺１０ｃｍ程の正四面体で、それぞれの面にコネクタが１個ずつ付いていた。
僕は目を見張った。

「これが！　これが『例のモノ』か！　こんなにも小さいのか」

驚嘆して、その物体にを釘付けの僕を見て、星野の目が輝いた。

「そうですよ、新井さん。コネクタは、規格を指定できますよ」

今の僕に、そんな言葉は聞こえなかった。

「触っても、持ってもいいですか？」

僕は星野を上目遣いに眺めながら、上ずった声で訊いた。
星野は手のひらを上にして手をかざして、にこやかな表情で言った。

「どうぞ、どうぞ。そう簡単には壊れませんから」

その言葉を聞いて、僕はちょっとためらった。

「これはイミテーションモデルではない？」
「本物ということですか？」

星野は更にニヤリとした。

「ええ、本物です」
「この状態でも、ちゃんと機能してますよ」

「我々は無駄なことはしない主義ですから」

それを聞いて、僕は更に驚いた。

震えながら、その銀色の四面体をつかんだ。

かすかに暖かい感触が伝わった。

そしてオープン状態のコネクタに手をかざすと、かすかに何かを感じ取ることができた。

ギャラクシー社が極秘に販売を始めた、生命維持装置「ライフ・ジェネレータ」

小さな四面体に船内排気入力の2系統、船内清気出力の2系統だけでセンサー無し。

だが、フルオートで宇宙船の生命を維持する、というものだ。

「このサイズでＥＶＡなら２４時間フル稼働します」

「２人までのシップならこのサイズで……」

星野は、マニュアルも見ずに淡々と説明した。

「えー、５年以上の稼動実績があります」

「もっとも、我々は永久使用を保証していますが」

僕は星野を見た。

「え？　地球で５年以上の有人計画はないぞ」

星野は「しまった」という顔をして、慌てて取り繕った。

「実は、これは極秘なんですが…」

「某国には月に基地がありまして、そこでの実績なんです」

僕は勝手に早合点した。
確かに月に基地があるという噂がまことしやかに流れていたからだ。

「そうですか」

四面体を眺めながら、僕は星野に訊いた。

「これの動作は、どういう原理なんです？」
「これの中身は、どうなっているのです？」
「是非、中を見せていただきたい」

すると、星野は元のポーカーフェイスに戻った。

「申し訳ございません」
「その件に関して、契約に関わらず非公開です」

星野はカバンから書類を出して言った。

「宇宙局で進行中の計画はこのサイズで十分です」
「新井さん、サンプル貸出申請許諾書です」
「これが契約約款、必ず目を通してください」
「これにサインを。２週間の貸出となります」

僕は書類にサインした。
星野は念を押した。

「くれぐれも中身を見ようと思わないように」
「それでは、２週間後に」

星野はカバンを抱えて出て行った。

装置への好奇心

翌日の宇宙局は、「ライフ・ジェネレータ」の話題で持ち切りだった。
見せてほしいという他部門の主査の申し入れや同僚の要求があったがそれは出来なかった。
契約上、僕だけが携わることが出来るのだ。ギャラクシー社のセキュリティ対策である。

実験室に持ち込んだ「ライフ・ジェネレータ」は測定機で外観の検査と寸法測定した。
１／１０００００オーダーでの精密な正四面体だ。
表面は金属光沢があるが、金属ではないという反応が出た。
さらにＸ線解析装置では、組成が不明であった。
また、ＣＴおよびＭＲＩによる断層検査も、透過しないので中の構造は分らなかった。

様々な試験機にかけてデータを取った。
出力はこちらの計画値を十分にクリアし、常温以上の発熱、振動、動作の異常は認められなかった。

不思議なことに、こちらが出力を求めるとそれに見合った反応をするのである。
それはランダムでもシーケンスでも反応が必ず追従する。
そして排気側だけ、あるいは清気側だけでも使用可能なのだ。
しかも、動作音が皆無なのである。実に不思議な機械である。

全ての検査が終わり、設計資料用の図面と数値をはじき出してレポートにした。

とにかく、次の宇宙計画の中心である、オービターの要である。
少しでも軽く作ることが命題である。
この「ライフ・ジェネレータ」なら従来の生命維持装置の１／１０どころではない。
１／１００の容積、重量しかない。しかも安全だ。更に動作保証されている。

僕は、これを組み込んだエアコンディショナの設計に取り掛かった。
しかし、それは強制換気装置と配管のみである。あとは必要なかった。
設計ということを強いて挙げれば、「ライフ・ジェネレータ」のコネクタを選定したことであろう。
しかし、逆にこれは宇宙局の規格をあてはめただけなのだが。

測定や検査で思わぬ時間を使ったようで、瞬く間に１２日が過ぎて、貸し出し期間もあと２日となった。
僕は、ギャラクシー社の星野に電話を入れた。星野はそそくさと告げた。

「そうですか。設計は終わりましたか」
「すこし早いですが『返却』ということで、今からそちらに引き取りに伺います」

僕は驚いた。

「え？　それはおかしいでしょう？　契約の２週間は、２週間ですよ！」

星野は厳格に言った。

「ええ、判っております」

「しかし、私共の大切な商品です。もしものことがあると困ります」

僕は少したじろいだ。

「それはそうですが…」

それでも星野は続けた。

「約款６７条、不測は全てお客様の責任とする」

「約款６７条の２、全ての責任はお客様負担とする」

「いいですか、新井さん。何があってもあなた方の責任となりますよ」

それでも、僕は抵抗した。

「不測ってどんな事態なんです？」

星野は、諭すように言った。

「商品の、盗難、破壊、分解。契約や商品の、情報公開、管理不行き届き」

「いいですか、そのまま待っていて…」

星野が言い終わらないうちに電話を切った。

『何としても、原理を知りたい』

『どうしても、中を見たい』

僕は「ライフ・ジェネレータ」を持って、車に飛び乗った。

装置の秘密

助手席に「ライフ・ジェネレータ」を置いて、宇宙局を出て車をとばした。
あてはない。ただ、闇雲に車を走らせた。

どこをどう走ったか分からないが、気付くと山の中へと向かっていた。
どうも気分が悪い。ムカムカと吐き気がする。
精神的に追い詰められているからだろうか。

やがて舗装道路が終わり、林道に入った。
頭が痛くなってきた。道がデコボコで、車が揺れるからか。

それにしてもひどく痛い。
鼻水が垂れてきたのかと、触って確認すると鼻血だった。
どうしたというのだ?

頭痛と悪心で運転できない程に、辛くなってきた。
鼻だけでなく歯茎からも出血している。
止むを得ず車を止めた。

鼻血をふき取りながら「ライフ・ジェネレータ」を取ろうと、助手席を見た。
すると「ライフ・ジェネレータ」は真っ黒に変色していた。
しかもかなり発熱しているらしく、シートが黒焦げになっていた。
ジャケットを脱いで、それで「ライフ・ジェネレータ」を包んで、抱えて車の外に出た。

もうフラフラだった。全く歩けなかった。
2歩、3歩と歩いて、つまずいた。
その拍子に「ライフ・ジェネレータ」が転げ落ち、石に当たって壊れた。

「ライフ・ジェネレータが！」

慌てて這いずり、壊れた「ライフ・ジェネレータ」に近づいた。

「ライフ・ジェネレータ」の中には、装置らしい物は何もなかった。
ただ、黒いひも状のものが何かしらの図形を描いているだけだった。

「何てことだ！　これは一体何なんだ」

途方に暮れている僕の後ろから、聞き覚えのある声がした。

「それは『時空転移相』というものだ」

振り返ると、銀色の人影があった。
しかし、顔は「星野」であった。

僕は既に身体を横たえて身動きできない状況だったが、辛うじて声を出した。

「じくう、てんい、そう？」

「星野」は答えた。

「あぁ、そうだ。時空転移相だ」
「時間と空間を越えて物質を移送できるのだ」

「そのための『魔方陣』のようなものだ」
「ちゃんと理論的なものだがな」

僕は、息も絶え絶えだった。
それに関係なく「星野」は説明した。

「我々の星では常識のことだ」

僕はゆっくり顔を上げた。

「お前は異星人だったのか」

「星野」はニヤリとした。

「そうだ。工作員として送り込まれた。地球人の監視のためにな」
「ま、それはそれとして…」

「星野」は、一息置いて話し始めた。

「君は契約違反をした」
「それで、君にはその責任を取ってもらった」

僕は黙って聞くしかなかった。

「その装置は、こちらでリモートできる。だから、君が車で逃げた時に仕掛けた」
「１９５４年３月１日のビキニ環礁の空気を送り込んだ」

その時、僕は悟った。
この症状が「放射線障害」であることを。

「君は間もなく、息絶えるだろう」

「星野」は最後まで冷静だった。

「冥土の土産に教えてやろう」

「２１世紀になった頃に、二酸化炭素の増加があったろう」

「あれは、この装置のせいだ」

「あの時代の空気と入れ替えているだけなのだ」

「あの時代は誰も疑ってないからな」

僕の意識は薄れてきた。

「星野」の話を聞いているだけの状態になっていた。

「今回の件については、君はプルトニウムを持ち出した。そして被曝した」

「…というシナリオになっている」

「大丈夫、あとは上手くやっておくよ。それでは、さらばだ」

そう言って「星野」は飛んで行った。

僕は腕を上げたが、その手は血まみれだった。

既に表皮細胞が崩壊を始めている。

筋肉もダメのようで、上げた腕が地面に落ちた。

眼も見えなくなってきた。

「あぁ…」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2497d/

ライフ・ジェネレータ

2010年10月28日05時18分発行